

証人尋問に関する申出書

平成26年10月27日

東京地方裁判所刑事第6部 殿

東京地方検察庁

検察官 検事 神 田 正 淑

被告人高橋克也に対する殺人，殺人未遂，爆発物取締罰則違反等被告事件につき，証人井上嘉浩，証人中川智正，証人新實智光，証人林こと小池泰男及び証人廣瀬健一の各証人尋問を実施するに当たり，下記の理由により，刑事訴訟法157条の3第2項に規定する証人と傍聴席との間で，それぞれ相互に相手の状態を認識することができないようにするため遮へい措置等を講じられたく，申出します。

記

1 犯罪の性質

本件は，オウム真理教（以下「教団」という。）の教祖である麻原彰晃こと松本智津夫（以下「麻原」という。）が説いた危険な教義やその指示に基づいて教団信者が組織的に行った一連の凶悪重大事件であり，証人井上嘉浩（以下「井上」という。）及び中川智正（以下「中川」という。），証人新實智光（以下「新實」という。），証人林こと小池泰男（以下「林泰男」という。）及び証人廣瀬健一（以下「廣瀬」という。）は，いずれも地下鉄サリン事件等の本件犯行にも関与し，重要な役割を果たしたもので，その犯行状況，犯行前後の状況及び被告人の関与状況等に関し，極めて重要な証人である。

2 証人の心身の状態その他の事情

- (1) 井上，中川，新實，林泰男及び廣瀬（以下「井上ら各証人」ともいう。）は，それぞれ宣告された死刑判決が確定しており，いずれも東京拘置所に拘置中である。

死刑確定者を公判廷に出廷させる場合，多数の傍聴人が見守る中での公開法廷への出廷により，一時的ではあるものの，再び社会に身を置くことになり，そこで受ける刺激によっては，それまでは心情の安定を得られていた死刑確定者であっても，再び社会に戻りたいという気持ち等から心情が不安定となり，例えば，自暴自棄となって第三者を巻き添えに生命を賭

して逃走を図るなど、裁判員、裁判官その他の裁判所職員、弁護士、検察官、さらには一般市民である多数の傍聴人等に対する殺傷事案を引き起こすことになりかねない。

また、井上ら各証人は、いずれも教団の幹部だった者たちであり、多くの現役の教団信者や麻原を現在でも信仰する者たち、あるいは、かつての仲間である元教団信者たちが、井上ら各証人の尋問を傍聴しようとするのが予想され、井上ら各証人が傍聴席から受ける刺激は、死刑確定者にとって相当強いものとなり、心情が不安定となるおそれは強いと言わざるを得ない。

さらに、報道等によれば、アレフでは麻原の次男を擁立する動きが見られるなど後継者問題をめぐり対立状況にあり、麻原の長男は自己の名前が無断で使用されたとしてアレフを提訴するなどしているところ、麻原の長男は中川と、麻原の次男は新實と定期的に面会している状況にある。加えて、傍聴席には、麻原の親族らが来る可能性もあり、井上ら各証人が傍聴席に麻原の親族らの姿を認めたときの心情に与える影響の大きさ、その影響に伴う法廷内の混乱は計り知れないものとなる。

- (2) 井上ら各証人は、元教団幹部というのみならず、地下鉄サリン事件前の「通達」で昇格予定だった者も含めれば、いずれも正悟師以上と教団内のステージが高い者たちであったこと、少なくとも中川、新實及び林泰男は、今もなお教団関係者との交流が続いており、新實に至っては現在でも麻原に対する強い帰依心を有していること、東京拘置所周辺には麻原の巡礼と称して信者が徘徊する姿も見られることからすると、井上ら各証人を出廷時に奪還する動きも否定はできず、オウム信者指名手配犯の最後の一審公判であり、奪還を計画する者にとっては最後の機会であることから、むしろこれまでより危険性は高まっている。

また、近時、東京拘置所周辺では過激な右翼団体が、「松本智津夫及び死刑判決を受けている者、早く処刑しろ。」、「オウム真理教、腹を切れ。」、「オウム真理教に天誅。」などと街宣活動を活発化させているところ、井上ら各証人が出廷する際に、右翼団体が、東京地裁内外において、井上ら各証人に対し同様の非難を浴びせかけるほか、井上ら各証人自身が襲撃されるおそれもなしとしない。かかる状況におかれれば井上ら各証人の心情の安定が害され、十分な証言が得られないばかりか、一般人を巻き込むあるいは井上ら各証人が犠牲となる殺傷事案等を引き起こすことにもなりかねない。

傍聴席と証人との間に遮へいの措置が講じられることは、このような奪還や襲撃の動きを少しでも抑止することにつながり、この側面からも井上ら各証人の心情の安定への配慮に資するものである。

- (3) 死刑確定者の内心は通常一般人では計り知れないものがあり、刑事収容施設及び被収容者等の処遇に関する法律32条1項は、「死刑確定者の処遇に当たっては、その者が心情の安定を得られるようにすることに留意す

るものとする。」と規定している。ここにいう「心情の安定」とは、死刑確定者が、死刑の執行を待つことによる精神的な苦悩や動揺を克服し、あるいはコントロールできる状態にあることを意味し、心情の安定を害するような外的条件を排除するという形で配慮すべきものとされている（逐条解説刑事収容施設法 98 頁以下参照）。

同法は、究極の刑罰である死刑制度を維持、運用する以上、刑事施設側に対し、日々自己の死と向き合わなければならない状態にある死刑確定者の特殊性を踏まえ、その心情の安定を重視するとともに、人道的観点からも、心情の安定を得られるように十分配慮した処遇を行うことを求めたものと解されるが、本件においても、同法の趣旨は重視されるべきであり、井上ら各証人の「心情の安定」には、法廷においても極力配慮されてしかるべきである。

よって、公開の法廷で衆目の監視する中で証人尋問を実施することは避けるべきである。

3 結論

以上から、井上ら各証人の証人尋問の際には、本件犯罪の性質、井上ら各証人の心身の状態その他の事情を考慮すると、井上ら各証人と傍聴人との間に遮へいの措置を講じることが相当と認められることから、同措置を講じられたく、申し出る次第である。

以 上